

をそうあっさりとはかたづけなかったはずだが、と問いかえしたくもなる。弟のサンドラールはこういうわかり切った（ように見える）ことに一切関心を示さなかった。社会と人間との関係が一般にそうだとしても、一方の人間―俺―はどんなのだということに関心を持つことから詩が始まった人間だった。

ブレーズ・サンドラールが1961年パリで死んだ時、兄はその葬式に馳せ参じた。その席で、さまざまな人が彼に近づいて来て、サンドラールの思い出話しをした。「弟さんは、しかじかの方でしたね」「詩人はこういう方でしたよ」と。そういう感想を聴かされるたびに、兄は「失礼、それは誰れのことですか？ブレーズのこと？まさか……いや、それは人ちがいではありませぬか、あなた、ブレーズというのはね……」と同じことばを繰り返さねばならなかった。そして彼が「本当」の弟のことを語りはじめると、きまって相手は（この男、自分の弟のこともわかっていないのか）と言わんばかりの嘲笑をふくんだ顔付をした。ジョルジュは逃げるようにしてジュネーヴへ帰って来て、ある人に涙ながらに訴えた。「誰れも、あの葬式に参列した中の誰れ一人として、ブレーズのことをわかっている者はいなかったよ。私だけが、おそらく私だけが、弟がどういう人間だったかを知っているのだ」

ここにも、「正しい」伝記と「文学的」伝記との溝というやっかいな問題が横たわっている。どうしても弟の「正しい」伝記を書きたいと会う人ごとにもらしていたジョルジュもついに、その作業に着手することもなく、弟の死後、五年にして他界した。ふたたび多くの「真実」の方は暗闇にうもれ「文学」があいかわらず光を放っている。

（つづく）

---

## ブレース・サンドラール小伝(2)

加 太 宏 邦

ラ・ショ=ド=フォンのド・ラ・ベ通り27番地で詩人の父母は新しい生活を始めた。この村は当時ここを通ったある旅行家のエッセーによると「ヨーロッパで最も人口の多い村」と記されている。1865年約16,000人、1890年約26,000人、1900年約36,000人という記録を集めてならべてみると、人口が多いだけでなく、急増していることがわかる。この村へ来て4年しかたっていない、いわばよそ者のジョルジュが不特定の仕事に就いていられたのもそのおかげかも知れない。マリ=ルイズの方も、この村の宿屋の番頭の娘であったとはいえ、生れはバーゼルで、兩人ともどもよそ者であるだけでなく、はっきりスイス・アレマニクの血をひいていることは記しておいてよいであろう。詩人の「他者」意識の深い根のひとつはおそらくここにあると考えられるからである。

結婚二年目（それは今からちょうど百年前の1882年のことであるが）の8月7日、二人の間に子供が出来た。サンドラールの姉となるこの女の子はマリ=エリザベートと名づけられ土地の学校を終えると店員見習いに出されたあと1902年頃、つまり20歳頃、ローザンヌのちょっとした店の会計係に雇われて親元を離れた。その仕事をしているうちに、かつてバーゼルで（この一家のバーゼル時代のことは後にのべることになるだろう）おぼえたドイツ語を完璧なものにしくなって、スイスを出た。南ドイツのバイエルン地方へ出かけ、おそらく28歳頃（あるいは30歳になっていたか）に、異国で結婚してしまった。相手の男性はラールという苗字の歯科医だったそうで、この事実と、彼女が死んだのが1962年であるということまでは判明しているが、これ以外のことはほとんどわからない。彼女自身が、結婚後、実家と縁を切ったこと（理由はわからぬが家族の管と仲が悪かったらしい）又、彼女の弟たち、例えばサンドラールなども、姉のことについては、資料となるようなことは語っていないので、今のところ、この女性の80年の生涯はほとんどはまだ闇の中にある。

親子、きょうだいの関係がそんなに密でないのはヨーロッパの庶民にあっては中世からの一般的な傾向で、貴族出身でもない限り、普通のひとびとの身内につ

いてわたしたちが調べるとき、その家族や近親者のことをほとんど知り得ないのはむしろあたりまえのことである。サンドラールの「先祖」の一人にトマス・ブラターという人物がいて、この男自身は実存なのだが、フランスの歴史家リュシアン・フェーブルは『文明の主な様相—初期フランス・ルネサンス四景—』でたまたま次のような興味深いことを語っている。「トマス・ブラターは驚くばかり遠い時代（といっても彼からわれわれまで普通に数えて実は七・八世代程度しか離れていないのだが）、その遠い時代をまざまざ再現してくれる驚嘆すべき『回顧録』のなかで、いささかの驚きも示さず、まるで至極あたりまえのこのように、次の事実を語っている。彼がまだごく幼いころ父親が死んでしまったので、母親はすぐに再婚した。たちまち子供たちは離れ離れになる。そのためブラターも、正確に何人の兄弟姉妹がいたのかわからないと淡々と告白しているが、散々探した末に彼は二人の姉と三人の兄の所在を突きとめ、彼らがどうなったのか大体のところは知ることができたのだ。その他は謎また謎である。自分自身は伯母に引き取られた。母親については全然わからない。なるほどこれは、あの辺鄙なヴァレー地方の武骨な農民社会の慣わしかも知れない。しかしフランスの慣わしがこれにくらべてはるかに開けていたなどと言えようか」（二宮敬訳）引用が長くなったが、このブラターは奇しくもサンドラールの「先祖」でもあるので、よこ道にそれるが、もう少し書いておきたい。トマス・ブラターの名は一般にはあまり知られていないが、1499年2月10日ヴァレー州のグランジェで生れ貧困の中、独学で古典語を学び、ツヴィングリの弟子としてバーゼルでギリシャ語、ヘブライ語を教えるかたわら、大印刷業者として有名になった男で、とくにカルヴァンの歴史的著書『キリスト教綱要』の初版（1536年）の編集・印刷を手がけた人として忘れることの出来ない人物である。1582年（丁度、今から400年前）の2月26日、バーゼルで亡くなっている。ついでに言うと、息子達の内一人は医者で、バーゼル大学の学長フェリクス・ブラター、もう一人も医者だが、こちらは旅行記の作家としても知られている同名のトマス・ブラターだった。詩人は自分のこの「先祖」を「あまりにもあまり」の中だけでなく、妻にもラジオの対談でこう語っている。「僕の先祖にトマス・ブラターというのがいてね、1582年に死んでいるんだが、この男はヴァレーの小貴族で、14歳の時に山から降りて、読み書きを習い、放浪書生達と一緒にミュンヘン、ウルム、ニュールンベルグ、ポーランド、ザックス、

ハンガリーへ遊学し、宗教改革の最中にチューリッヒへ帰って来て、ツヴィングリ一派の活動家になろうとしたんだな。で、彼は来る日も来る日も学問、学問、学問で飢え死にしそうになったから、ガチョウを盗んだりして、それからヘブライ語を勉強したんだ。バーゼル大学のヘブライ語の教授になったんだが、実に学があって、アムステルダムからエラスムスがバーゼルに来て腰を落付け、この坊やとヘブライ語で会話しようつてことになったぐらいだ……」以下、この話しは延々と続くが、プラターがサンドラールの先祖だというのは、例のごとく、創作である。それでも詩人は、たくさんの点で、このプラターにある種の共感をおぼえるからこそいつもこの「先祖」をひきあいに出すのだろう。たしかに、骨太なイメージとか放浪家であるという面はサンドラールの先祖にふさわしい。先祖つくりの話しのおいでにもうひとりの「先祖」もあげておこう。サンドラールが好んであげる先祖の一人にレオンハルト・オイラーがある。1707年バーゼル生れの大数学者で、フリードリッヒ二世やエカテリーナ二世の庇護のもとに、力学、天文学、工学等々に偉大な業績を残した人である（今日でも〈オイラー方程式〉が知られている）。非常な勉強家で、28歳の時、片目の視力を失い、晩年には全盲となった。生涯のほとんどを外国に暮し、最後はペテルブルグの土となった人である。サンドラール自身、自分の「数学好き」はこの曾大祖父から来ているとうそぶく。彼の連想のもとには、おそらく（プラターと同様）〈バーゼル〉にあると思われる。この町は、母の生誕地であるだけでなく、その先祖が深いかかわり合いを持ち、又、彼自身も、のちにのべることになるが、この町で学校時代を過ごし、ドイツ語をほとんど母語のようにマスターしてしまった所でもあるからである。そしてオイラーの終焉の地〈ペテルブルグ〉はほとんど詩人の生涯の決定的な出発点となった地なのである。

よこ道への散歩が長くなりすぎた。少し本道へもどろう（サンドラールに本道があったら話しだが）。

詩人には姉について兄がいた。ジャン=ジョルジュと名付けられたこの兄は、姉とちがって、たくさんの事がわかっている。

1884年9月26日、同じくら・ショ=ド=フォンに生れた3歳ちがいの兄は、何かから何まで弟と正反対の人間だった。もしサンドラールをディオニュソス的と呼ぶなら兄のジョルジュは（芸術家ではないが）アポロ的な生活者だった。又、詩人

サンドラールはその作品からいうと、私たちが親しく手にとって愛読することが出来るなつかしい存在であるのかえってその人物となると、なかなか実生活のなま身に近づくことが出来ない。一方兄の方は著書からは一向に姿が浮び上がらないが私たちがその気になれば訪ずれて手っとり早く話しを聞かせてもらえるような人物だった。彼はヌシャテル大学で学び、法学博士となり、ヌシャテル大学、ジュネーヴ大学の教授を停年まで勤めた、国際私法、比較民法の大家であった。今、手許にある少し古い「ジュネーヴ大学要覧（1966年—1967年）」をさがし出して見ると、末尾に、名誉教授として、住所と電話番号が記載されている（彼は1966年3月12日に亡くなった。当然ながら、翌年の「要覧」からは彼の名は消えている）。彼は名誉教授になってからは、オランダのハーグ国際司法裁判所のスイス連邦代表判事として忙がしい日々を過ごしていた。若い頃から秀才であったが、とくに、26歳の時に書かれた『中立国における戦闘員の監禁』という論文はジュネーヴ大学のペロ賞をとり、ジュネーヴ、バーゼル、リヨンで出版された。その二年前、1908年に彼は結婚しているが、その相手は、サンドラールも恋していたアグネス（アニエス）という女性だった（このいきさつも先になってふれるだろう）。詩人は常に、この兄に先をこされ、胸の内では敵愾心が燃えていたであろう。彼が処女詩『ニューヨークの復活祭』を上梓したのは兄の処女出版におくれること二年であったが、この詩の右肩には「アニエスに捧ぐ」と小さく書かれている。

ジョルジュが弟と少し似ている点といえば彼は、主としてジュネーヴに生活をしたとは言え、国を離れて仕事をするのが平気なコスモポリタンだったということかも知れない。スタロピンスキーがスイス・ロマンドの文化人に対して、その特色としてあげる「はなれた立場」からの活動は、正にジョルジュ・ソゼにも当てはまる。「比較」とか「国際」ということを最も得意とし、ドイツ語や英語などが出来て、ゲルマン的文化にも深い理解を示すひとつのスイス・ロマンド知識人の典型がここには見られる。これは平均的なフランス文化人と大層ちがった点だと言えよう。

そう言えば、彼は少しおもしろい仕事を40歳の頃、外国でしている。

トルコ史で有名なムスタファ・ケマル・パシャ（アタチュルク）のスルタン・カリフ制の廃止からはじまる、いわゆるトルコ近代化革命の中で、1923年のことだが、この国に始めて法務省がつけられた。この時、マハムト・エサト・ボズク

ルトというアンカラ大学法学部創設者が、その経歴を買われて、法務大臣に任命されたのだが、彼は、かつて、スイスのフリブール大学法学部で学んだはじめてのトルコ人だった。近代化の波の中で、1924年共和国憲法が発布されたが、しかし、未だ、非イスラムの民法、商法、刑法は出来ていなかった。そこで、この法務大臣は、自分の母校に、その起草者になれる法学者を派遣してくれるようもとめた。フリブール大学には適任者がいなかったが、ヌシャテル大学に比較民法の専門家がいた。すなわちジョルジュ・ソゼで、請われて、トルコへ行くことになる。彼はいわゆる「お雇い外国人」として、民法を担当し、それは（日本におけるボワソナード民法典のように挫折することなく）みごとに完成の上、採択され公布されることになった。1926年のことである。婦人の解放や一夫一婦制などがもりこまれた完全な非イスラム法典であると言われる。この民法は、一部改正があったとしても、全体としては、サンドラールの兄の手になるものが今日でも生きているのである。

彼には非常に多くの著書がある。トルコの法制度について書かれたものもその内に二冊ある。しかし、それらの中でも、この種の本ではめづらしくロングセラーをつづけている啓蒙書があつて、これはスイスではかなりよく知られた『スイス政治手引』というものだが、これなどは、ある意味でわたしたちに興味深い。彼がまだ二十代の時に書かれた名著であつて、それ以来、半世紀の間、ずっと版を重ねて来ている。この著書の副題は「公法入門」となつていて、いわば政治学と法律学がスイスらしく幸福に合体した平易な一般むけの本で、歴史的にも又、スイスの政治、行政、司法、社会、宗教等についても幅広くとりあつた力作である。そして、その前書きを見ただけで、この本の姿勢が、スイスの平穏なブチ・ブル的社会の似姿であることがわかる。「国家と個人の幸福と繁栄は、各自の良心的で正しい判断にもとづく政治の運用に依存している」と、批判の余地のない、ごもつともな意見が述べられる。又、序論では、「人間は本来的に社会的な存在である。孤立しては人間は多様な願望を充足することは出来ないので、自分と似たものに近づきたいという本能的な欲求を持つ。この本能から人間社会は生れた」と言う。人間と社会との関係について、これほどつまらない「常識」はないので、たいていは異存はないとしても、そういう平板な社会観を正面切ってかけられると、なんとなく興ざめになる。同郷のジャン=ジャックはこの問題